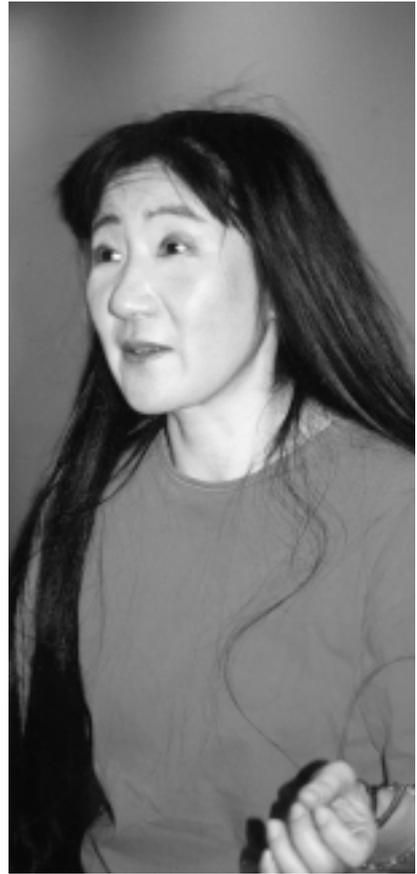


# 米国留学中 キャンパス セクハラ体験



(学生記者・竹尾 智成)

キャンパス・セクハラの体験を話

し、その心を体で表現する「一人芝居&フリーディスカッション」が11月27日、11号館で行われた。舞台俳優の高橋りりずさんが米国留学時に受けたキャンパス・セクハラ体験を「私は生き残った」という、いささかショッキングなタイトルで学生たち語りかけた。

高橋さんは上智大学を卒業後、米カリフォルニア大の大学院演劇科で修士課程を修了するまでの81年から84年までの間に、指導教官からセクハラ体験を受けた。この日のテーマは、高橋さんが20代の時に、どんな辛い思いをし、「どう生き残ったか」というものだった。

## “一人芝居”で表現

### 「独自の防止策確立を」

#### 舞台女優の高橋さん

高橋さんがセクハラを受けた後の周囲の反応は、次のようなものだった。先ず大学の窓口に訴えたが、まともに対応はしてもらえなかった。それは高橋さんが学問上の報復を恐れて学位認定試験に合格するまで、訴えるのを控えていたことを問題に

され、被害を受けて30日以内に訴え出なかったという理由で訴えを却下されたのである。その後、大学のあちこちの窓口にたらい回しにされながら抗議を続けたが、結局は諦めざるをえなかった。学位認定試験は加害者の教授が出

を去る決心をした。「泣き寝入り」の一言で片付けられるケースである。しかし、高橋さんにはこの決断までかなりの迷いがあった。目の前に明らかにある教授の不正を見過すことになるので、ここで改めて勇氣ある行動をとることに決めた。

入りする学部内で受けた。試験の1週間ほど前から高橋さんは食べ物を受けつけなくなり、当日はその教授と出会うかもしれない不安と恐怖のために吐き気に襲われ、試験の途中で何度もトイレに駆け込んだ。ここまで聞いていて、私は次第に身震いして怒りを感じてきた。高橋さんは被害がなかったことにされ、高橋さんには同大学院修了後、さらに演劇修行の計画があったため大学



学生と語り合う高橋さん

## 「日頃の疑問を大切に」

ところが、高橋さんは日本へ帰ってから参加した反性暴力運動の中で「セクハラ被害を受けながら、アメリカで裁判を起こさなかった」という理由で、支援を切られる仕打ちに

### 「知識は知恵あってこそ」

「このような経験をしていながら、いまでも専門家や運動家、マスメディアなどによって、被害者は『裁判を起こしたか』とか、『警察に訴えたか』とか、『その他、何らかの告発をしたか』といった、表面に出たことだけを基準に分類してしまいがちになる。被害者が警察や裁判に訴えるなどの告発をしなかったことだけをもって、その他いつさいの社会的アピールをしなかったかのよう

に『泣き寝入り』と決めつける」と高橋さんは訴えた。一方、「たとえ外部からは何もしなかったように見えても、実際には、その人が苦しみに耐えて生き残ってきたことに対して敬意を払ってほしい」ともいわれた。

そして一人芝居が始まった。ここで、ある印象的なセリフが出た。少

数友人が「生き残ったんだもの。本当に勇気あるよ」と、心こもった励ましをして、高橋さん自身が「私」がそのことを知っている」と確認する場面がある。

つまり、自分で結論づけているのである。世間に認められなくても自分が知っているからそれでいい、と自己肯定をするのである。

このシーンでライトは消え、フリーディスカッションに移った。ここでは集まった学生らの前で自己紹介や、さまざまな質問を受ける形で、なごやかに場は盛り上がった。高橋さんは積極的に自らの体験、意見を語ってくれたので、聞きにくい質問も気軽にできる雰囲気であった。

このなかで興味深かった話は「私は泣き寝入りなんかしない」と学問で教わった知識だけを基に発言する

女子学生を見かけるが、そういう学生がセクハラ被害に遭ったとき、適切な形で大学の窓口に訴えたりできるかといえば、そうではない。実際に被害者となった学生が受けるショックは計り知れないほどであり、悲しいが机上の学問だけでは、そのような辛い体験を克服することはできない」というものだった。

「何か中大生にメッセージがありますか」と学生が聞くと、高橋さんは「知識は知恵があつてこそ、使いこなせるものだよね」といわれた。そして知恵は、なにげなく過している毎日のなかで、なにかしら疑問を感じると思うが、その一つ一つを大事にしていくと、自然に身につくと、高橋さんは結んだ。

## 『相談の手引き』をじっくり読もう

中央大学はセクシユアル・ハラスメントに対して、どのような対応策をとっているか。ゼミの授業などで『相談の手引き』という冊子を配っているの、見覚えのある学生は多いと思う。これにはかなり丁寧に対応が載っている。「中央大学セクシユアル・ハラスメント防止宣言」なるものも出されている。

各大学も最近、セクハラ問題に関しては相談機関を増やしたりして、積極的に取り締まりを厳しくしている。今後男女相互が互いに思いやり、尊厳の気持ちを持って過ごすことが大切だと思う。



演 熱



高橋さんは以前から、この種の意見や提言を新聞などに投稿している。その主な提言は次の通り。

- ①セクハラ対応窓口と加害者との利害が一致しないようなシステムを作り、窓口を大学の外に設置する。大学内に設置しても、それを監視する機関を外に置くなど、オンブズマン・システムを取り入れる。
- ②一般的な法律の考え方を、キャンパスに持ち込むというやり方ではなく、弱者が有利になるような独自のキャンパス・セクハラ防止策を確立してしまい、それを逆に、一般的な法律に影響を与えるように持つていく。

## まず、防止策の充実を

- ③セクハラ問題とアカハラ（アカデミック・ハラスメント）学業上のいやがらせ）問題を分けないで、一緒に処理をする。
- ④時効は設置しない。

⑤キャンパス・セクハラ防止策を充実させることが、日本の女子学生より、もっと不利な立場にある女子留学生へのしわ寄せにつながらないように注意する。

以上の5つの提言は現在の大学の問題点を鋭く突いており、なかなか興味深かった。